



た。何が美味しかったの？と聞かれても私は答えない。絶対に答えない。なぜなら、これを読んだ人は親子丼の味が想像で分かってしまい、もうそこで料理を食べていないのに完成してしまうからだ。ぜひ、これは直接こぐま亭に足を運んで食べてもらいたい一品である。そう言われると、ワクワクが止まらなくなるのだろうか。ぜひそのワクワクしている気持ちのまま、残りの私を読んでもらいたい。

一時間半のフリータイムは何をして過ごそうか。そう無計画のまま歩き出し、角館高校の裏坂よりも急な坂を上り、すぐに下る。映画のワンシーンにもありそうな光景に心が踊った。まだ稲刈りが始まっていない黄金の絨毯が敷かれたあの光景にも心が奪われる。今思えば、黄金の絨毯に絵がついた田んぼアートをじっくりと見たのも数年ぶりである。これはここでしか見られない。内陸線に乗った者の特権である。笑内のチーズ饅頭をお土産に買い、帰りの内陸線に乗る。帰り際に葉を貰った。そこには大きく「ありがとう」と書かれていた。私は前に角館駅でも貰っている。そこには「よい学校生活応援しています」と温かいメッセージが書かれているのを思い出した。これは、都会でもよくある事なのだろうか。いや、内陸線に乗らなければ、触れ合うことのできない内陸線ならではの優しさだ。

「次は八津です」このアナウンスが流れるまであつという間だった。聞き慣れた声といつも笑顔で見送ってくれるアテンダントさん。そして、あのワクワクはただこの旅が楽しいからだけではない。内陸線に乗らなければ、見られない景色がある。会えない人がいる。「内陸線が好きだ」そう改めて思ったからだ。

見たい景色がある、会いたいひとがいる秋田内陸線に、明日も明後日も数年後も乗りに行こうと思う。スマイルレールはずっと誰かの心に残り続ける。これからあるかもしれない。ガツタンゴットンと揺れながら始まる一人旅が。